

## 持続可能な開発目標に関するフィンランド・日本市民対話

中村秀規\*、上野ふき\*\*、杉田暁\*\*\*、福井弘道\*\*\*

\*富山県立大学、\*\*大阪大学、\*\*\*中部大学

### 1. はじめに

問題複合体に関するコミュニケーション方法を開発するために、中部大学問題複合体を対象とするデジタルアース共同利用・共同研究拠点の支援を受け、同拠点とともに、2015–2021 年度に継続して、我々は「(無作為抽出で案内を受けた) 市民が、環境エネルギー政策 (高レベル放射性廃棄物処分) に関し、市民どうしで、また専門家と対話する方法」を、市民参加型・場づくり型事例研究として愛知県春日井市・静岡県御前崎市 (原子力発電所立地自治体)・福島県南相馬市 (原子力発電所被災自治体) で行った。対面方式では、春日井市で 3 回、御前崎市で 1 回、南相馬市で 1 回、開催した。2019 年度は春日井市会場と御前崎市会場をオンラインで結んで市民対話を実施した。また 2021 年度は、春日井市民と南相馬市民を一人一人完全オンラインでつないで市民対話を実施した。提案した対話手法は、対話への態度をより肯定的にし、また自己内対話 (熟慮) を促進することが示唆された (Nakamura et al. 2021)。また、異なる在住市の混合の有無や、完全オンラインと対面の違いによる、対話の様子や対話内容の異同、また参加率の違いを見出した。

この成果を踏まえ、本研究では、国連持続可能な開発目標 (SDGs) について、国境を越えた市民対話を行い、対話への態度のみならず、協働の範囲 (国境を越えた協働の可能性) や集団的特性の自覚 (所属集団の当たり前を別の視点から見る可能性) を実証的に検討した。SDGs は、全ての個人、地域、そして地球を包摂する、私たちが望む未来に関するビジョンである。その実現には、分野や地理的境界を越えた協働による、自らが納得した自己変革の過程が必要である。本研究では、フィンランドと日本をオンラインでつなぎ、SDGs (生物多様性、包摂性・ジェンダー) をテーマとする市民対話を行い、SDGs の進捗国際比較で上位にあるフィンランドと市民水準で日本人が学ぶ機会を創出するとともに、フィンランド発祥の精神療法であるオープンダイアログの手法 (リフレクティング) を応用して、地球市民意識の醸成や、文化特性への自覚の可能性を探った。

研究代表者は、アカデミーオブフィンランド・日本学術振興会の二国間交流事業の支援を得て、2021 年 10 月より 2022 年 9 月までポスドクとしてヘルシンキ大学に研究滞在した。フィンランドにおけるオープンダイアログ文化と持続可能な発展政策過程について研究し、成果を論文として発表した (Nakamura et al. 2024)。リフレクティングを含むオープンダイアログの国際オンライン研修にも参加した。本研究実施に当たっては、この研究滞在中の受け入れ研究者がフィンランド側の協働研究者となった。

本研究は、デジタルアースの実装にあたって、科学的エビデンスとともに、主観・価値観にも配慮したプラットフォームの創出を目指す貴拠点に、対話研究の観点から貢献を目指すものである。また、本研究は、意思決定支援技術の開発研究であると同時に、生態 (生物多様性) と社会 (ジェンダー) という、問題複合体の具体的事例への、地域から国そして国際水準での取り組みである。

### 2. 方法

インターネット調査会社パネルに登録しているフィンランド、日本それぞれの市民 (18–69 歳男女) に無作為に案内を行い、48 名の参加者を募集し、週末半日 (3.5 時間程度) のオンライン市民対話を行った。具体的には 2023 年 9 月 9 日 (土) に実施した。各国全地域より性別・年代が均等になるように募集を行った。当日、フィンランド人 3 名、日本人 1 名が体調等で欠席した。最終参加者は 44 名であった。時差を考慮し、フィンランドは午前、日本は夕方時間帯で実施した。プログラムは表 1 のとおりである。

表 1 市民対話のプログラム

フィンランド時間	日本時間	事項
8:20 – 8:30	14:20 – 14:30	受付
8:30 – 8:40	14:30 – 14:40	開会、概要説明
8:40 – 10:10	14:40 – 16:10	ジェンダーについてグループ対話（ラウンド1）
10:10 – 10:20	16:10 – 16:10	休憩
10:20 – 11:50	16:20 – 17:50	生物多様性についてグループ対話（ラウンド2）
11:50 – 12:00	17:50 – 18:00	全体ふりかえり、閉会

フィンランド人6名、日本人6名、計12名からなるグループを4つ形成し、各グループにフィンランド語・日本語間の通訳（逐語通訳）を1名、およびファシリテーターを1名、それぞれ配置した。テーマは、生物多様性（環境課題）、およびジェンダー（社会課題）の2つとし、それぞれ事前学習資料を共有した上でそれぞれのテーマについて1回ずつ、合計2回のグループ対話を行った。事前学習資料としては、まずSDGsに関する各国報告書のジェンダー平等、生物多様性保全に関する政府および市民社会組織の評価の箇所を用いた。その他、分かりやすいインターネット上の解説情報を提示した。SDGsの理念の一つはゴール間の関係性・統合性の重視であることから、生態と社会のいずれをもテーマとした。生物多様性については、2022年に昆明・モントリオール生物多様性枠組が採択され、その中でもジェンダーに配慮された意思決定過程が重視されているほか、フィンランドでは国内森林保全と利用を巡って論争が起きている。ジェンダーについては日本で特にさらなる進展が必要とされるSDGsゴールとなっている。

生物多様性についてはフィンランド人、日本人3名ずつの6名の小グループ（「フィ」・日混合）2つのペアを作成し、一方の小グループが対話するのを別の小グループが聴いて、次いで、聴いていた小グループが聴いたことに即した応答を行い、そして再度最初に話し合った小グループが感じたことを話す、リフレクティングによる対話を行った（矢原、2016）。いずれも聴いている小グループメンバーは、カメラをオフにして聴き、その間は話さなかった。その後、話し、聴く役割を小グループ間で交代して対話した。ジェンダーについてはフィンランド人6名、日本人6名の小グループ分け（「フィ」・日別々）のペアで、同様のリフレクティングによる対話を行った。各参加者から見ると、一つのテーマについて1ラウンド、全体で2ラウンドの対話を行った。リフレクティングの目的は文脈によって複数ありえるが、本研究においては、「聴かれ、応じられること」、および「自らを振り返るスペースを創り出す」とした。リフレクティングのスタイルは次のようなものである：「わたしは」で始める；語られた言葉に結び付け、応答する（xが・・・と言った時）；暫定的な考えとして話し、一般化を避ける（もしかすると…、…かもしれない）；短く；合間をおいてゆっくりと；開かれた問いも可。

本研究では、持続可能な発展に向けた変革に向けた、文化的な継承（困難と可能性）への気づきを促すことを目的としていることから、対話のための問いかけ（ファシリテーション・クエスション）として「男女の社会的関係や、人間と自然環境との関係について、どのような習慣を社会全体で問い直してみたいだろうか」を設定した。この問いは事前配布資料で提示するとともに、当日のファシリテーターによる説明、およびZoomのチャットへの掲載を行った（フィンランド人に対してはフィンランド語で、日本人に対しては日本語で）。

市民対話の事前と終了時の質問紙調査により、対話への態度（異なった考えを持っている人の話を聴けるか、話せるか）、協働の範囲（国籍等属性の異同や知己の有無による信頼の程度）、文化的継承への気づき（変革に向けた可能性と制約に関する自覚）の変化を明らかにした。「対話への態度」を測定する尺度変数は日本での市民対話で用いてきたものである（Nakamura et al. 2021）。「協働の範囲」を測定する尺度変数については、実施中の科学研究費補助金「SDGs時代の環境政策市民対話：協働と対話文化に関する日台社会調査」においてWorld Values Surveyの信頼尺度を参照して独自に提案し、日本と台湾でのインターネット社会調査で用いたものである（Nakamura and Chen 2023）。「文化的継承への気づき」を測定する尺度変数は、本研

究において独自に提案し、初めて用いるものである。質問紙調査では、フィンランド人参加者にはフィンランド語が、日本人参加者には日本語が用いられた。

本研究で検証する対話の手法（リフレクティング）および態度変数（対話、協働範囲、ふりかえり）は、デジタルアース実装に向けて、エビデンスに基づく熟議の際に、主観・価値観・アイデンティティといった（変容しがたいとされる）側面を考慮した場づくりを行う上で必要な、意思決定支援技術の要素である。

### 3. 結果

#### 3.1 参加者の SDGs に関する知識

参加者の SDGs に関する知識は、対話前においては日本人参加者の方がフィンランド人参加者よりも平均的に知識を有していた。また、対話を経て、フィンランド人、日本人ともに知識水準が向上した（図 1）。

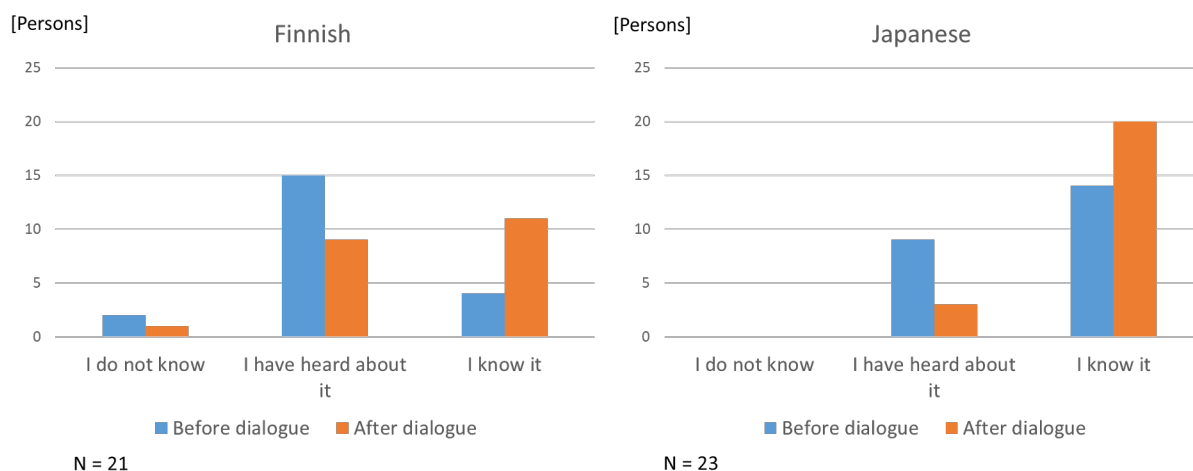
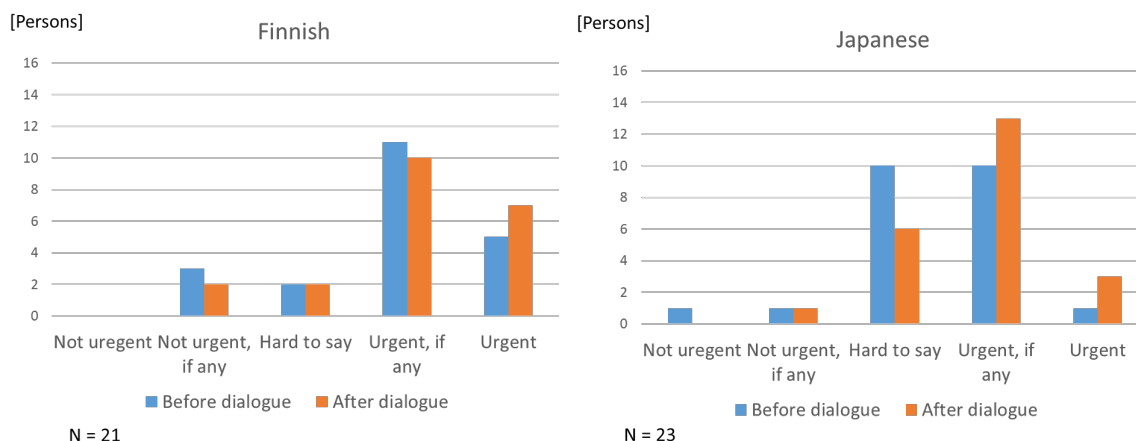


図 1 参加者の SDGs に関する知識

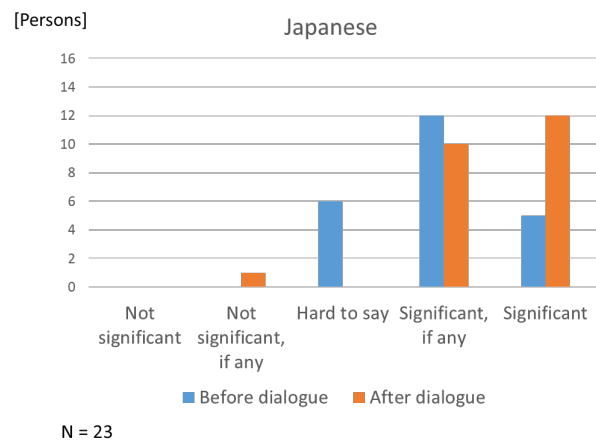
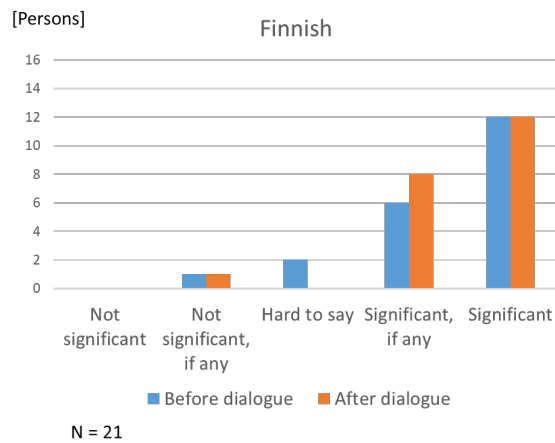
#### 3.2 ジェンダー平等、生物多様性保全の緊急性・重要性評価

図 2 に示されるように、対話前においては、ジェンダー平等、生物多様性保全、いずれも、フィンランド人参加者のほうが、日本人参加者よりも緊急性、重要性ともに高く認識していた。また、対話後、日本人参加者は、ジェンダー、生物多様性、いずれに関しても緊急性、重要性ともに評価が高くなった

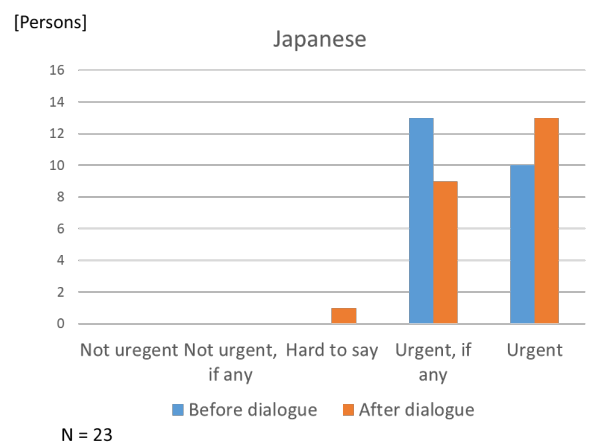
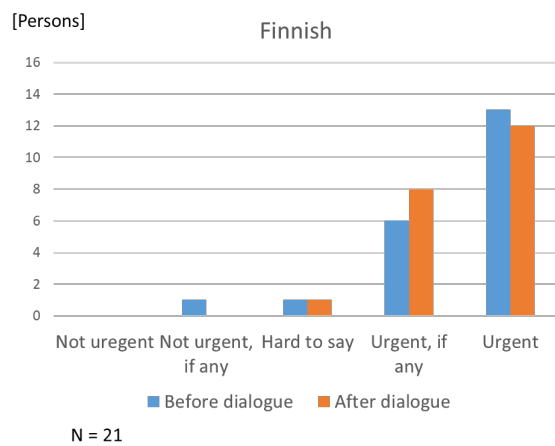
### ジェンダー平等に関する認識: 緊急性



## ジェンダー平等に関する認識: 重要性



## 生物多様性保全に関する認識: 緊急性



## 生物多様性保全に関する認識: 重要性

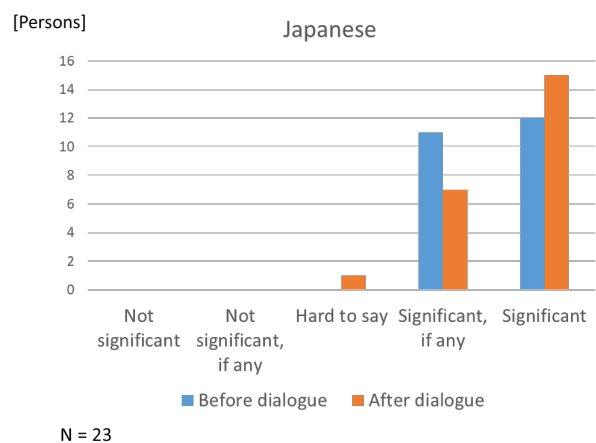
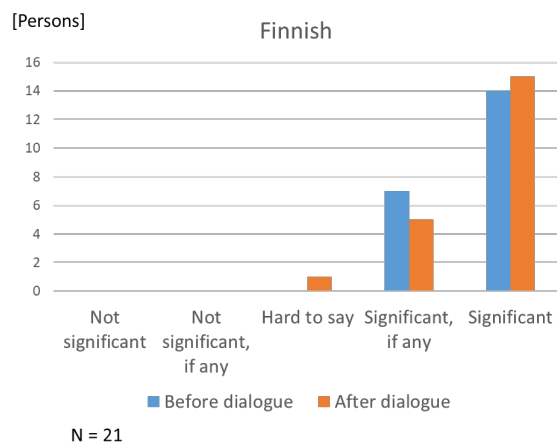


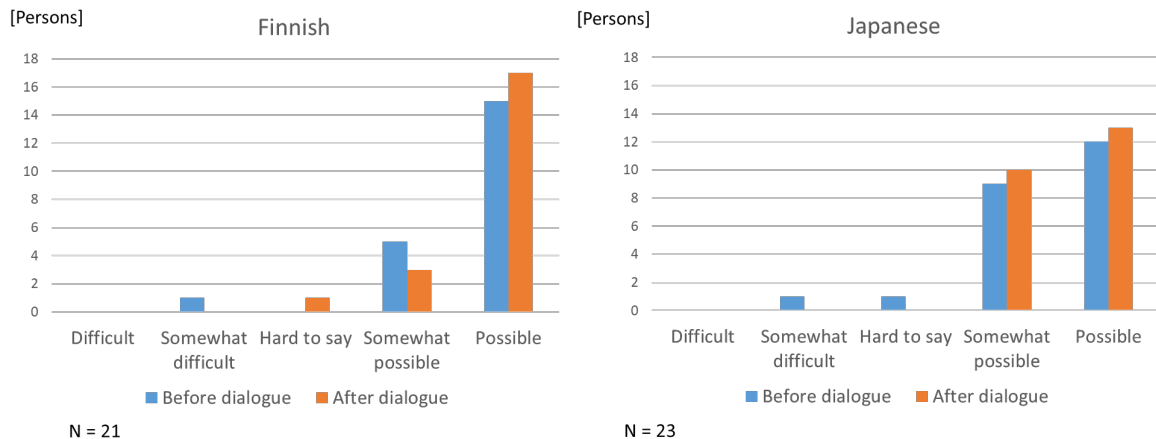
図2 ジェンダー平等、生物多様性保全の緊急性・重要性評価

### 3.3 対話への態度

図3に示される通り、対話前、フィンランド人参加者は、日本人参加者より、異論を「聴く」、「話す」ともに、より肯定的な態度を持っていた。一方、対話後、日本人参加者は「聴く」「話す」ともに（フィンランド人参加者は「話す」で）、より肯定的な態度になった。

#### 対話への態度: 異論を聴く

“Are you able to **listen** to others with a view **different** from yours, regarding social, national, or local issues, without rejecting it, if not accepting it?”



#### 対話への態度: 異論を話す

“Are you able to **convey** your own ideas to others who may have **different** ideas from yours regarding social, national, or local issues?”

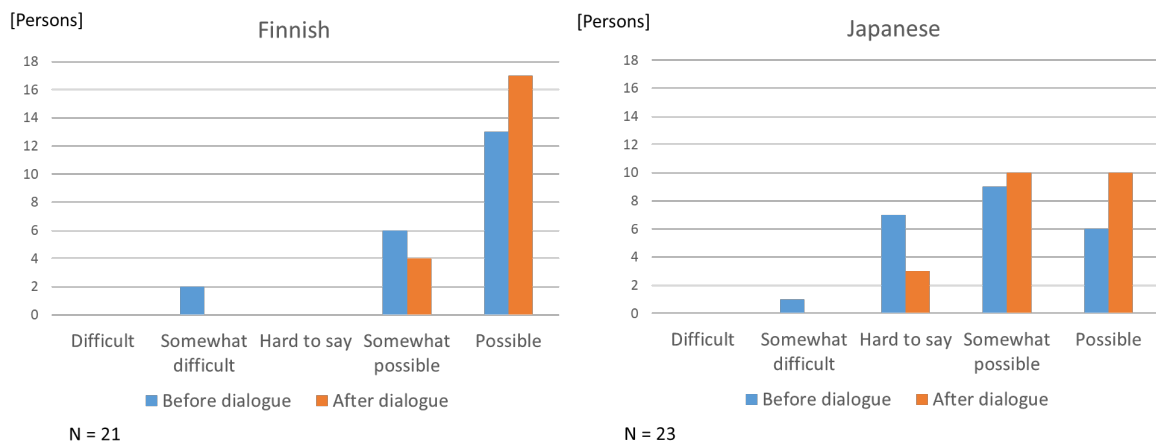


図3 対話への態度

### 3.4 協働の範囲（信頼できる人の属性と範囲）

図4に示されるような、世界価値観調査で用いられる信頼に関する質問文と選択肢、およびそれを一部修正した質問文を用いて、信頼できる人の範囲から協働の範囲を推定した。

3-1 Generally speaking, would you say that most people can be trusted or that you need to be very careful in dealing with people? Please select an appropriate answer.

- (1) Most people can be trusted.  
(2) Need to be very careful.

3-2. We would like to ask you how much you trust people from various groups. Could you answer for each whether you trust people from this group? Please select an appropriate answer.

Person in question                      Answers: (1) Can be trusted (2) Need to be careful

- (A) Personal acquaintance  
(B) Unknown, same nationality  
(C) Unknown, same political orientation, regardless of nationality  
(D) Unknown, different political orientation, regardless of nationality  
(E) Unknown, same economic level, regardless of nationality  
(F) Unknown, different economic level, regardless of nationality  
(G) Unknown, same industry, regardless of nationality  
(H) Unknown, different industry, regardless of nationality  
(I) Unknown, same religion, regardless of nationality  
(J) Unknown, different religion, regardless of nationality  
(K) Unknown, same education level, regardless of nationality  
(L) Unknown, different education level, regardless of nationality  
(M) Unknown, same ethnicity, regardless of nationality  
(N) Unknown, different ethnicity, regardless of nationality  
(O) Unknown, regardless of nationality

図 4 協働の範囲を測定するための信頼に関する質問文

図 5 に示されるように、信頼比 (trust ratio) で測定して、対話前、フィンランド人参加者は、日本人参加者よりも、平均的に、人一般、知人、同国籍人、あらゆる人、などすべての属性に対して日本人参加者よりも高い信頼 (より広い協働の範囲) を提示した。また、フィンランド人参加者は政治的志向性が異なると、日本人参加者は職業が異なると信頼度が大きく下がることが示された。

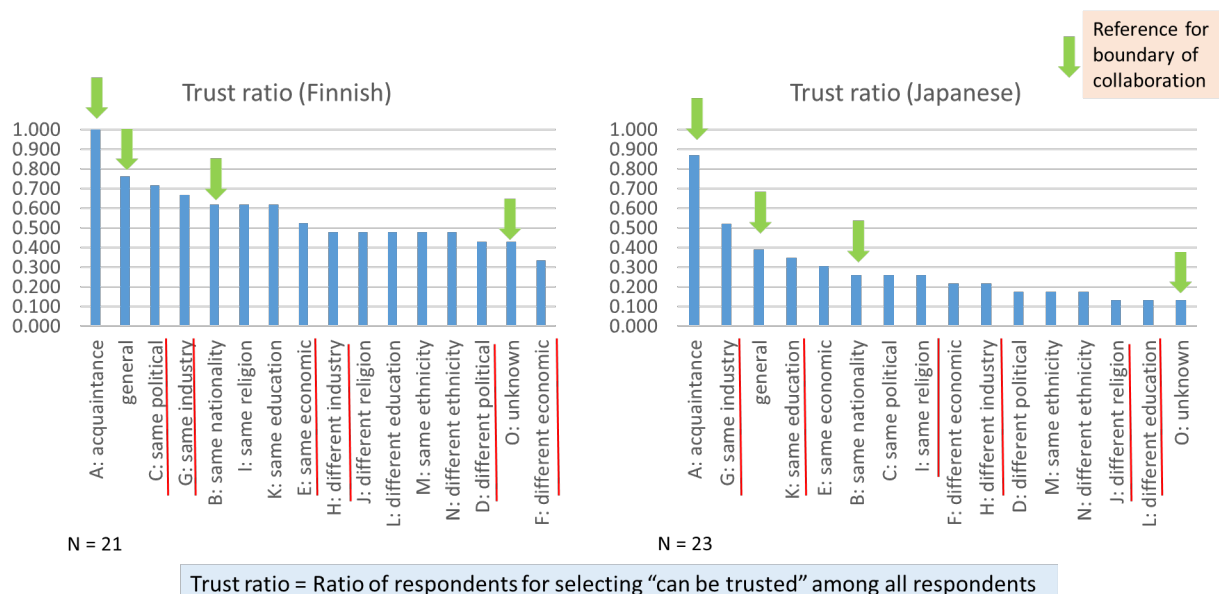


図 5 協働の範囲 (信頼比/スコア) : 対話前

一方で、対話後、日本人参加者の異なる職業の人、異なる教育水準の人、およびあらゆる人に対する信頼が向上した (効果量はそれぞれ 0.385, 0.333, 0.333。絶対値で 0.3 以上の効果量を効果ありと判断した)。フィンランド人参加者については対話前後での信頼の向上は見られなかった (図 6 および 7)。

Attribute	Pre-dialogue	Post-dialogue	Difference	Effect size (d-value)	Attribute	Pre-dialogue	Post-dialogue	Difference	Effect size (d-value)
general	0.762	0.810	0.048	0.116	H: different industry	0.476	0.524	0.048	0.095
A: acquaintance	1.000	0.905	-0.095	-0.459	I: same religion	0.619	0.619	0.000	0.000
B: same nationality	0.619	0.619	0.000	0.000	J: different religion	0.476	0.476	0.000	0.000
C: same political	0.714	0.571	-0.143	-0.302	K: same education	0.619	0.571	-0.048	-0.097
D: different political	0.429	0.476	0.048	0.096	L: different education	0.476	0.476	0.000	0.000
E: same economic	0.524	0.571	0.048	0.096	M: same ethnicity	0.476	0.524	0.048	0.095
F: different economic	0.333	0.381	0.048	0.100	N: different ethnicity	0.476	0.524	0.048	0.095
G: same industry	0.667	0.619	-0.048	-0.100	O: unknown	0.429	0.476	0.048	0.096

Trust score: “can be trusted” = 1, “careful” = 0

図 6 協働の範囲（信頼比/スコア）：対話前後でのフィンランド人参加者の平均信頼スコアの増加量

Attribute	Pre-dialogue	Post-dialogue	Difference	Effect size (d-value)	Attribute	Pre-dialogue	Post-dialogue	Difference	Effect size (d-value)
general	0.391	0.391	0.000	0.000	H: different industry	0.217	0.391	0.174	0.385
A: acquaintance	0.870	0.739	-0.130	-0.333	I: same religion	0.261	0.435	0.174	0.371
B: same nationality	0.261	0.304	0.043	0.097	J: different religion	0.130	0.174	0.043	0.121
C: same political	0.261	0.478	0.217	0.462	K: same education	0.348	0.391	0.043	0.090
D: different political	0.174	0.130	-0.043	-0.121	L: different education	0.130	0.261	0.130	0.333
E: same economic	0.304	0.478	0.174	0.362	M: same ethnicity	0.182	0.348	0.174	0.404
F: different economic	0.217	0.348	0.130	0.293	N: different ethnicity	0.182	0.217	0.043	0.110
G: same industry	0.522	0.391	-0.130	-0.264	O: unknown	0.130	0.261	0.130	0.333

Trust score: “can be trusted” = 1, “careful” = 0

図 7 協働の範囲（信頼比/スコア）：対話前後での日本人参加者の平均信頼スコアの増加量

### 3.5 持続可能な発展に向けた文化的継承への気づき

持続可能な発展に関する文化的継承への気づきを問うため、「社会と環境の持続可能な発展に向けて、私は、フィンランド人/日本人\*としてどのような文化的困難と可能性を継承しているか、考えることができる」（\*は参加者に該当するものを提示）という文章について「できない」から「できる」までの 5 点尺度で自己評価を対話前後で参加者に尋ねた。図 8 に示される通り、対話前、フィンランド人参加者の方が、日本人参加者よりもより気づきに関する自己評価が高かった。また、対話後、フィンランド人参加者も、日本人参加者も、自己評価が向上した。対話前後での「できる」を選択したかそれ以外の選択肢を選んだかの二項分布に関するクロス集計表を用いた効果量を計算すると、フィンランド人について  $\phi = 0.487$ 、日本人について  $\phi = 0.417$  といずれも中程度の効果となった。



「社会と環境の持続可能な発展に向けて、私は、フィンランド人/日本人\*としてどのような文化的困難と可能性を継承しているか、考えることができる」

\*: 参加者の国に応じて変更

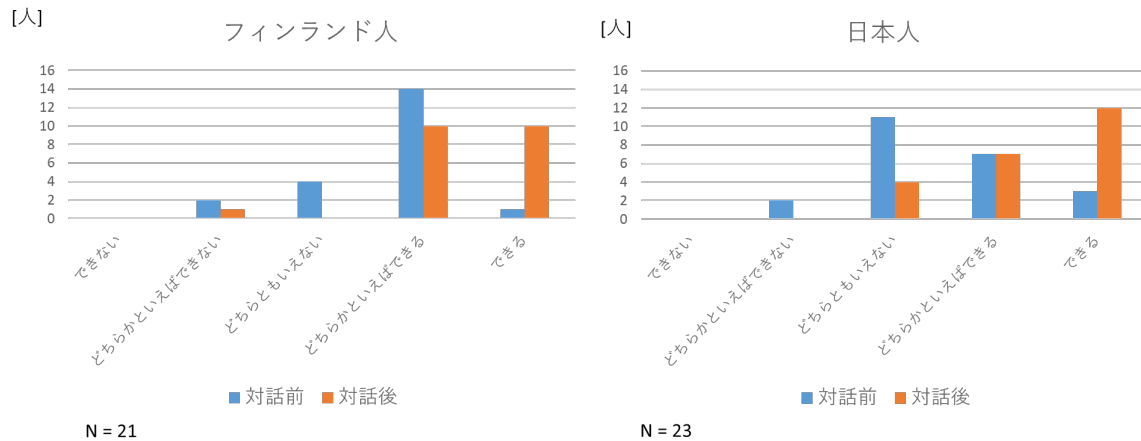


図 8 文化的継承への気づき

また終了時調査における自由記述からは、図 9 に示されるような、文化的継承への気づきを示唆する回答が得られた。

*“Thank you for this fine opportunity for conversation. I believe that moderated citizen dialogues between different nationalities would connect us and give each culture some new ideas and thoughts about their own environment, and would help them look at it from an outsider's perspective. A heartfelt thanks to everyone.” (Translated by the author) (Finnish, Female, 60s)*

*“It was good to hear opinions from people other than myself and my family in Japan regarding SDGs efforts, and I was also able to learn about efforts in Finland. As I was listening to the session in Finland, everyone was thinking about things they wanted to work on, and they were also thinking about legal issues across Europe and the national budget, so I was inspired by how they were thinking broadly. I also wanted to learn from them.” (Translated by the author) (Japanese, Female, 40s)*

図 9 文化的継承への気づきを示唆するコメント（終了時調査への自由記述内容より）

### 3.6 参加者の対話への満足度と対話の公正性評価

図 10 および 11 の通り、参加者の対話への満足度は高く、また対話は公正に行われたと評価された。

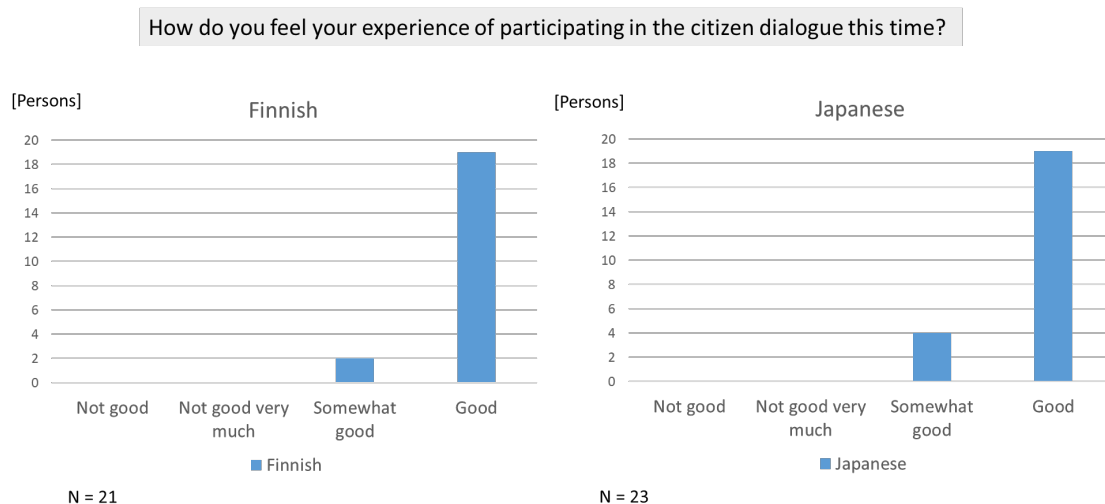


図 10 参加者の対話への満足（終了時調査）



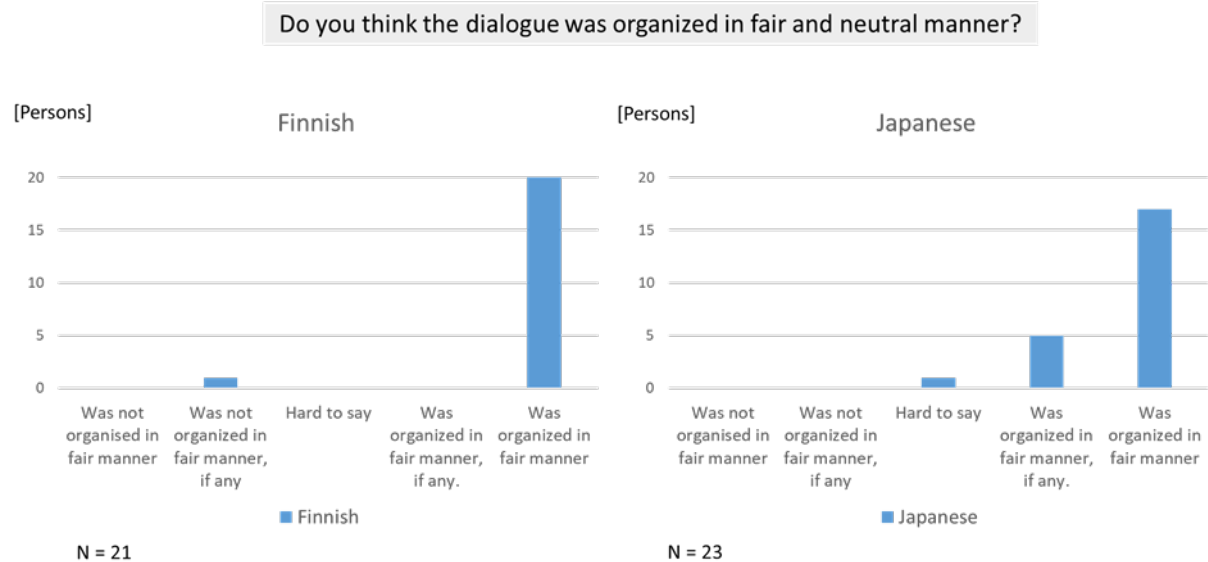


図 11 参加者による対話の公正性評価（終了時評価）

### 3.7 リフレクティングの実際——発話への応答はなされたか

表 2 は、ジェンダー平等、生物多様性保全、それぞれの対話ラウンドで、セッション 1 で話された話題のうち、続くセッション 2 で応答されたものを示す。4 グループ全てで、2 つのラウンドいずれにおいても、セッション 1 の話題に対する応答がセッション 2 で行われたことが確認された。したがって、リフレクティングの目的の一つである「聴かれ応じられること」は、全てのラウンドで達成されたと言える。

表 2 応答されたか？各ラウンドで、セッション 2 で応答された、セッション 1 での話題

グループ	ラウンド 1 (ジェンダー平等)	ラウンド 2 (生物多様性保全)
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>フィンランドにおけるジェンダークォーター（割り当て）制度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>長く使える商品の生産</li> <li>瓶のリサイクルのためのデポジット（預託）制度</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本におけるジェンダー不平等とその歴史的・世代による変化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自動車利用と公共交通</li> <li>スーパーマーケットと飲食店におけるフードロス</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>フィンランドにおける保育職および看護職における女性多数状況</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自然保護と自然活用のバランス</li> <li>フィンランドにおける森林伐採の補償（オフセット植林）制度</li> <li>日本での水汚染</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の教育分野におけるジェンダー不平等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>フィンランドの家庭や日本のスーパーマーケットでの資源分別とリサイクル</li> <li>日本におけるフードロス削減に向けた努力</li> </ul>

## 4. 考察と結論

本研究では、リフレクティングの手法を用い、SDGs に関するフィンランドと日本の間でのオンライン市民対話を実施した。異なる国の間の対話が、ジェンダー平等と生物多様性保全に関する緊急性と重要度の認識を増大させることを実証的に示した。同時に、二国間の対話により、対話への態度をより肯定的にし、信頼スコアで測定した場合の協働の範囲を拡大し（地球市民意識の高揚につながる）、そして持続可能な変容に向けた文化的継承に関する気付きを強めた。これらの効果は、対話前にフィンランド人よりも弱い態度を示し

た日本人において、より顕著に観察された。また、フィンランド人、日本人ともに、文化的継承に関する気付きの向上について中程度の効果量が確認された（フィンランド人： $\phi = 0.487$ 、日本人： $\phi = 0.417$ ）。この方法論の開発とフィールド実践への適用は、持続可能性に関する文化的困難と可能性に関する自覚についての能力強化の可能性を探求する上で、持続可能性研究への新たな貢献である。実証的な測定法は、少人数集団と母集団の双方の水準で、能力の状態をモニタリング・評価することを可能にする。持続可能な発展に向けた変革のための集団的意思決定過程に、リフレクティングの手法を伴った市民代表による対話を制度化して埋め込んでいくことで、自覚と反省の能力強化をさらに追及することが可能である。

## 5. 今後の展望

持続可能性を巡る変革についての異なる国をつないだ市民対話の可能性の全体像を明らかにするには、他のヨーロッパとアジアの諸国どうし、アジア諸国どうし、そしてグローバル・サウスとノースの境界を越えて、持続可能性に関する争点についての、リフレクティング手法を用いたオンライン市民対話をさらに行っていく必要がある。さらなる異文化間市民対話を通じて、国境を越えた市民どうしの対話の多様性と共通性を見い出すことができる。リフレクティングを用いた持続可能性に関する異文化間市民対話は、人新世に緊急に求められている反省性・再帰性の能力強化の一部となりうるものである（Dryzek and Pickering 2019）。

## 6. 謝辞

市民対話に参加くださったフィンランドと日本の皆様、市民対話を可能としてくださいましたファシリテーター、通訳、研究助手の方々に感謝します。本研究を推薦し勇気づけてくださった、エーヴァ・ファーマン フィンランド持続可能な発展国家委員会事務総長に感謝します。本研究は中部大学問題複合体を対象とするデジタルアース共同利用・共同研究 IDEAS202306、スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団 2023 年度助成、アカデミーオブフィンランド・日本学術振興会ポストドクトラルフェローシップ（2021–22 年度）の助成を受けたものです。

## 参考文献・データ

1. Nakamura, H., Ueno, F., Higashihara, H., Hayashi, M., Sugita, M., Fukui, H. 2021. Toward Citizen Dialogue-led Environmental Governance: An Exploratory Case Study in Post-Fukushima Japan. *Environmental Management* 67:868-885 <https://doi.org/10.1007/s00267-021-01433-6>
2. Nakamura, H., Rask, M., Kojo, M. 2024. An Open Dialogue Culture and Transformative Policy Process for Sustainability: Exploratory Case Study of Finland. *Journal of Environmental Studies and Sciences* 14:52-68 <https://doi.org/10.1007/s13412-023-00858-1>
3. 矢原隆行、2016. リフレクティング——会話についての会話という方法、ナカニシヤ出版。
4. Nakamura, H., Chen, W.-L. 2023. Dialogue and Collaboration for Sustainable Development in Japan and Taiwan: Epistemic Foundation of Partnership toward Sustainable Development Goals. *Environmental Science and Policy* 145: 238-249 <https://doi.org/10.1016/j.envsci.2023.04.017>
5. Dryzek J.S., Pickering, J. 2019. *The Politics of the Anthropocene*. Oxford University Press.